

『古代アメリカ』18, 2015, pp.131-142

<調査研究速報 特集>

考古学者による古代遺跡の資源化とそのジレンマ —国家的モニュメントとしてのテオティワカン—

福原弘識

(埼玉大学ほか、非常勤講師)

1. はじめに

テオティワカンは古典期前期（後 200 年—後 600 年）のメソアメリカにおける経済的、政治的中心の一つとして、考古学的に重要な遺跡である。遺跡はメキシコ・シティーの北東 45 キロ程に位置し、前 150 年頃から後 550 年頃まで栄えた。最盛期には都市域が 20 平方キロメートルを超え、人口は 10 万人以上に達した [Cowgill 2015:1-7]。都市中心部にあたる遺跡公園内には、都市の南北軸にあたる「死者の大通り」が伸び、この北端に「月のピラミッド」、東側に「太陽のピラミッド」、南東に「羽毛の蛇神殿」を擁する「城塞」が配置されている^(註¹)。テオティワカン政体は、後 200 年頃までに国家と呼べる段階に達し[Cowgill 2015:1]、生産・流通システムを支配した[Murakami 2014]。

テオティワカン遺跡は学術面だけでなく、現代メキシコにおける観光資源の一つとしても重要である。後述するように、遺跡の観光開発はメキシコ連邦政府の国家政策として推進されてきた[Rutsch 2004]。また地域経済も観光産業を拠り所として発展してきた。観光開発は連邦政府と観光産業の強い後押しに支えられ、INAH の統計によれば(表 1)テオティワカン遺跡の観光客数はメキシコ国内遺跡中最多を維持し続けている。このように遺跡の観光資源化はうまく進んでいるが、学術調査対象については連邦政府と考古学者の思惑との間で齟齬が生じ始めている。

本稿では、考古学調査・研究に携わる者の一人として、考古学者が常に向き合うことになる地域住民、地方自治体、そして連邦政府といった様々なレベルの交渉相手の中から、特に公的機関である連邦政府と考古学者の関係性の分析を通して、古代遺跡の資源化の現状を論じる^(註²)。そして、テオティワカンという国家的モニュメントの調査・活用が、今なお政治的・経済的な思惑の下で進む一方で、それに翻弄されて学術調査が停滞するというジレンマに陥っている現状を報告する。

2. 国家政策としてのテオティワカン開発：遺跡資源化のプロセス

テオティワカン遺跡はどのように国家的モニュメントとなっていたのか。テオティワカン遺跡は 1910 年にあたるメキシコ独立 100 周年記念事業の一環として、ポルフィリオ・ディアス政権下の国家プロジェクトにより調査・開発された^(註³) [Batres 1908, Rutsch 2004]。現在の考古学調査の一つとして観光開発のための調査があ

り、そのモデルの初期の成功例がテオティワカン遺跡の開発であったといえる。ディアス政権は革命によって倒されるが、その後も古代遺跡を観光資源として開発する政策の下、考古学者と連邦政府の蜜月関係は深まっていた。テオティワカン遺跡の調査は、その政治的関係の影響を多大に受けながら進められてきたのである。まずはテオティワカン考古学調査の歴史から整理したい。

2-1) テオティワカン遺跡の調査史

テオティワカンの広義における「発掘」は、すでに先スペイン期からなされている。「テオティワカン」とは、ナワトル語で「神々の都」の意である[López Luján 1989:13]。遅くとも15世紀において、先住民はその都の廃墟を「遺跡」と認知していたようで、例えばナワ人たちは神々の後継者として自らの出自を喧伝する目的で、この「遺跡」を「発掘」して遺物を持ち去り、自らの建築物にもテオティワカン様式を取り込んだ [López Luján 1989:87-89]。

巨大な建造物群が残存していたこともあり、植民地時代においても、テオティワカンはスペイン人たちの目を引いている。1580年代に、植民地の政治的な把握を目的として新世界各地でなされたアンケート調査の報告書『地理報告書』(*Relaciones Geográficas*)の中には、ピラミッドのスケッチが描かれている。そして1675年前後には、カルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラというヌエバ・エスパーニャ生まれの歴史家が、「月のピラミッド」前庭部において、「発掘」を実施している^(註4) [Schávelzon 1983:122]。

本格的な測量・発掘調査は19世紀後半から盛んになり、経済発展と近代化の進んだディアス政権下で最初のピークを迎えた。1905年から1910年には、レオポルド・バトレスが「死者の大通り複合」や「太陽のピラミッド」の発掘調査、修復と復元をし、考古学博物館を建設した[Batres 1908]。テオティワカン遺跡は、メキシコ独立100周年を祝って1910年9月に一般公開が開始され、名実ともにメキシコを代表する遺跡として、国家的モニュメントとして国内外に認知されていくことになる。

1917年には、メキシコ革命後の政権下において、マヌエル・ガミオ [Gamio 1979 (1922)] を団長とする調査が開始される。この調査は先スペイン期から現代までを対象として様々な専門家が参加した学際的調査であり、その後のメキシコ考古学・人類学を支える人材を育てた大プロジェクトであった。その後、大型調査はいったん下火になるが、1962年から1964年のイグナシオ・ベルナル [Bernal 1963] を団長に据えた国立人類学歴史学研究所 (*Instituto Nacional de Antropología e Historia*: 以下、"INAH"と略記) による調査は、バトレス以来50年ぶりの大規模な遺跡公園整備事業として、発掘調査と保存・修復作業、そして新しく遺跡博物館を建造した。また、遺跡公園は1964年に改めて一般公開された。このプロジェクトにより、テオティワカン遺跡中心部の大半が復元されて観光資源化が果たされたのである。1960年代はアメリカ合衆国のロチェスター大学のレネ・ミロン [Millon 1973] による遺跡地図作成と表面最終・発掘調査プロジェクトとペンシルバニア大学のウィリアム・サンダースら [Sanders et al. 1979] によるテオティワカン盆地を含むメキシコ盆地のセトルメント調査など、国外研究機関による大型調査も行われ、テオティワカンの時間的・地政学位置づけに関する学術的理解が進展した。

1980年-1982年には「羽毛の蛇神」の石彫でよく知られている「羽毛の蛇神殿」と、この神殿を含む複合建築物である「城塞」を中心とした発掘調査 [Cabrera et al. 1991] が行われた。その後、1987年の世界遺産登録を挟んで1992年-1994年にも「太陽のピラミッド」の発掘調査と博物館建設を目的としたINAHの大規模調査団が組まれた。また2001年には3番目の博物館として壁画博物館 (2006年に再開館) が整備された^(註5)。

1994年以降、現在にいたるまで国家プロジェクト規模の大型調査は行われていない。しかし研究機関やINAH

による通常規模の学術調査、緊急発掘調査部門による調査プロジェクトは途切れることなく実施されており、現在もその件数自体は依然として多い。2012年から2014年までの3年間にテオティワカンで行われた考古学調査は毎年6件、合計18件にのぼる^(註6)。調査件数の多さは、近年加速する遺跡周辺の都市化による緊急発掘調査の増加や、テオティワカン遺跡自体の規模と範囲に起因する部分も大きい。だが、テオティワカン遺跡があるメキシコ州において、テオティワカン以外の遺跡で行われた考古学調査は、同3年間に2件のみであるため、テオティワカンの考古学調査数が突出しているのは明らかである。

これら長年の調査により、テオティワカンに発生した強力な権力を持つ政体が国家を建設し[Cowgill 2015, Sugiyama 2005]、周辺人口の大半がこの都市に集中した[Sanders et al. 1979]ことが分かってきている。こうしたテオティワカンの権力中枢部の様子については、考古学資料も増加し、理解は進んでいる。しかし、テオティワカン社会の調査だけから理解できることには限界もある。例えばテオティワカン社会の発生プロセスや周辺社会との関係性についての理解は進んでいない。この問題を解明するためには、クイクイルコやトラパコヤ、トラランカレカといった先行諸社会やセロ・デ・サンルーカスなど周辺村落社会、またテペアブルコのようなテオティワカンの衛星都市など、テオティワカン遺跡以外の遺跡調査も同時に進めていく必要がある。だが、テオティワカン遺跡への考古学調査一極化の傾向は止む気配がなく、周辺諸遺跡の学術調査は進んでいない。なぜ調査対象に偏りが出るのであるのか。その原因は、テオティワカン遺跡の観光資源としての価値の高さや、考古学者と連邦政府の関係性にある。

2-2) 観光資源としての価値：古代遺跡のブランド力と多様なコンテンツ

INAHの統計によれば(表1)、テオティワカン遺跡公園の年間入場者数は2014年現在およそ250万人に達しており、メキシコ国内遺跡公園の中でトップの入場者数を維持し続けている。2000年に300万人を越えて以降、下降傾向が続いていたものの、近年の入場者数は再び上昇傾向にある。人気の観光ルートは次のようなものである(図1)。観光客は、バスが到着する遺跡南西の第1ゲートから入場し、正面にある「城塞」とその中の「羽毛の蛇神殿」を経て「死者の大通り」沿いに北上し、「太陽のピラミッド」を頂上まで登る。それから、第5ゲートの石材採掘場跡にある「洞窟レストラン」などで食事をした後、遺跡博物館と植物園を見学し、「死者

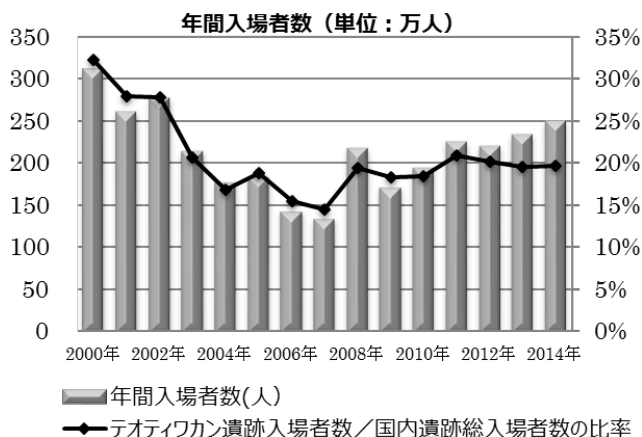


表1 テオティワカン遺跡公園の入場者数推移

[INAH 統計 online: <http://www.estadisticas.inah.gob.mx/>]を基に作成

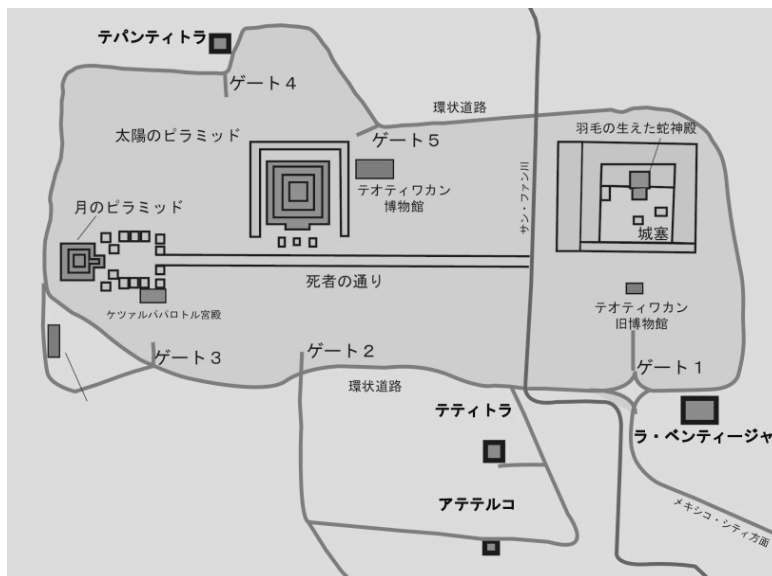


図1 テオティワカン遺跡公園地図

の大通り」を再び北上し「月のピラミッド」に登る。最後にすぐ脇にある「ケツァルパパトルの宮殿」を通過し、お土産物屋をのぞき、第3ゲートからメキシコ・シティ行きバスに乗って帰路に着く。メキシコ・シティから日帰りできる手軽さもさることながら、「太陽のピラミッド」や「月のピラミッド」の威容、「羽毛の蛇神殿」の精巧な石彫、住居域の壁画、特別展会場を含めて3つもある博物館など見るべきものは多い。もし、公開されている遺跡や博物館の全てを網羅しようとするならば、とても1日で見てまわることはできない規模がある。しかし、主要なピラミッドを昇り、その眺望から古代都市の広さを体感して大きな満足が得られるという独特な経験だけでも、テオティワカン遺跡は観光客を魅了して止まない。

古代遺跡自体が持つ観光客を魅惑するコンテンツに加えて、1987年に選ばれた世界遺産というブランド力や、長年の観光開発によって積み上げられてきたコンテンツもテオティワカンの人気を支えている。遺跡内にある植物園、遺跡周辺に整備された土産物屋、地場の郷土料理だけでなくメキシコ各地の料理を提供するレストラン、1つ星から5つ星まで揃うホテル、気球を使った上空散策など、そのコンテンツは充実している。そして近年ではさらに多様化が進んでおり、クレーンで吊るされた状態で食事と眺望が楽しめるレストランも登場するなど、古代遺跡を様々な角度から楽しむアトラクションも用意されている。また遺跡周囲の町でも、遺跡観光や古代文化に関連したイベントが定期的に行われている。

さらには、それまでの日帰り観光地という立場から、長期滞在が可能な遺跡リゾート地として、新たなコンテンツの導入も進んでいる。テオティワカン遺跡周辺には既に多くのホテルが揃っているが、観光客が集まる春分の日前後などのイベント期以外の稼働率は高くない。宿泊施設の稼働率を上げるためには、観光客に数日を過ごしてもらう必要があり、そのための施設として造られたのがゴルフ場 (*Club de Golf Teotihuacan*) や動物園 (動物王国: *Reino Animal*) である。そもそもテオティワカン遺跡観光は、公開されている遺構と博物館だけを網羅するだけでも数日を要する規模がある。遺跡公園は、遺跡中心部だけでなくアテテルコ、テティトラ、テバンティトラといった住居址や壁画博物館など、遺跡公園中心部の外側にも広がっており、これらを見学するにはどうしても数日間の滞在が不可欠である。新たに造られたゴルフ場や動物園に果たしてどれだけの利用

者があるのかわからないが、メキシコ州政府観光局 (*Secretaria de Turismo del Estado de México*) は、近在の修道院やアシエンダなどの歴史的建造物を辿る観光ルートの一つにこれらの施設を組み込んでいる。

地元住民の多くは観光産業で生活している。例えば土産物生産の工房は地元住民が営んでいる。特に、先スペイン期からテオティワカンで作られていた黒曜石製品は、最もポピュラーな土産物として遺跡で売られ、中には遠くグアテマラまで土産物として輸出されているものまである^(註7)。考古学調査によって新たに発見された遺物があればイミテーションの製作を試みるなど、考古学調査への関心も高い。2013年当時、INAHのテオティワカン研究所 (*Cerámoteca de Teotihuacan*) で働いていた知人の考古学者によると、遺跡公園の第5ゲート前にあるマヌエル・ガミオ・テオティワカン研究センター (*Centro de Estudios Teotihuacanos “Manuel Gamio”*) では、定期的に考古学者が地元住民向けに最新の調査成果を講演し、地元学生向けには学校を回る教育普及活動が行われていた。これらの活動を通して、地元住民の考古学調査に対する理解を促す機会は十分提供されている。官民一体となった遺跡の観光開発や教育普及活動は、観光資源としての魅力を維持・強化するために有効に働いているといえる。

したがって、古代遺跡の観光の魅力を維持するためには、その源である考古学情報と解釈を更新し、常に供給し続ける必要がある。学術的問題設定も新たな考古学情報と解釈によって変化するものだが、テオティワカン遺跡で行われた考古学調査を見てみると、その調査対象地には偏りが見られる。前述したように、テオティワカンで行われた学術調査は2012年から2014年の間に18件を数える。そのうち遺跡公園内中心部の調査は11件にのぼり、遺跡公園外側の調査は外部資金を調達してきた外国人考古学者による7件であった。調査件数のみをみると、両者の差はそれほど大きくはないように思われる。しかしながら、遺跡公園の中心部と周縁部の調査の差は、期間・規模・予算、着目度などの点において、比較にならないほど大きい。周縁部において、外国人考古学者が実施した調査は、少額の予算で短期間実施されるため、発掘面積・調査規模は概して小さい。調査は、住居址を対象としたものが多いため、出土遺物は土器片や黒曜石といった基礎資料が大半を占める。一方、ピラミッドや宮殿址を扱う中心部の調査は、当時の国家的な政治・経済・祭祀・儀礼活動の中枢部を対象としているため、博物館展示の目玉になるような、着目度の高い遺物が出土するケースが少なくなく、一般社会にセンセーショナルな話題を提供し得る可能性も高い。調査資金に関しても、中心部を扱った方が連邦政府の予算を獲得しやすくなり、INAH所属考古学者もその他の研究機関に所属する考古学者も、結果的にテオティワカン遺跡の中心遺構に調査対象を定める傾向が見て取れる。遺跡公園の保全のためには、新たに発掘・公開された遺物や遺構の保存・修復も必要不可欠なため、政府から供給される予算も莫大なものとなる。

3. 考古学者と政府

考古学者にとって、政府機関の中で最も身近なのはINAHである。INAHは1939年に設立(旧機関は1897年創立)され、現在はメキシコ国家文化芸術庁 (*Consejo Nacional para la Cultura y las Artes : CONACULTA*) の管轄下にある。INAH本部とその31の地方センターは、先スペイン期から19世紀までの文化財に対する調査・研究・保護・保存・展示・教育普及といった文化財行政を担っている。全国の遺跡だけでなく、教会や修道院などの歴史的建造物と歴史学・考古学系の博物館はINAHの管理下にあり、考古学調査の許可や遺跡と出土遺物の管理をはじめ、文化財関連分野はINAHが統括している。また、INAHは保存・修復、博物館学の専門家を養成する国立保存修復学博物館学大学 (*Escuela Nacional de Conservación, Restauración y Museografía “Manuel del Castillo Negrete”*) と考古学者を含む人類学者を養成する国立人類学歴史学大学 (*Escuela Nacional de Antropología*

e Historia) を有しており、その卒業生たちの多くは正職員や臨時職員として INAH に就職するか、臨時雇いの調査員として考古学と関わっている。

メキシコで考古学者になるためには、通常、大学の考古学専攻課程を卒業する必要がある^(註8)。かつては 1938 年創立の国立人類学歴史学大学を含めラス・アメリカス大学やユカタン州立大学など一握りの大学にしか考古学専攻課程は存在しなかったが、近年、各地の大学に考古学専攻課程が設置され、考古学を学ぶ機会は増加している^(註9)。しかし、学位を取得したからといって調査研究にあたるわけではなく、継続的に考古学調査を企画・運営し、調査を主導する立場にあるのは、研究費を獲得できる大学や博物館など研究機関の研究者と INAH の中の一部の研究職員だけである。ただし、考古学調査は 1 人の考古学者で運営できるものではないため、調査現場で実際に働く大多数の考古学者は、調査が実施される数ヶ月だけパートタイムで働くフリーランスや学生である。これらパートタイマーの考古学者たちは、就職の機会を得るまでの長い期間をフリーランスや臨時職員、また観光ガイドなどをして渡り歩くことを強いられている。教育機関としての考古学専攻課程は増加したものの就職先が少ないことが敬遠され、ここ数年は考古学専攻課程を目指す学生の数が減少傾向にあるという^(註10)。

このように、考古学者といっても様々な立場の考古学者がいるが、実際の考古学調査を企画・運営するという意味において、調査主体となれる考古学者は一握りである。そして、大学や博物館に在籍する考古学者を除けば、メキシコにおける考古学調査主体者の多くは政府機関 INAH 所属の考古学者に限られる。なぜなら、在野の考古学者が資金を調達できる状況は非常にまれだからである。INAH 所属の考古学者が連邦政府の意向に沿った調査を行うという単純な構図は存在しないものの、彼らの調査資金はそれほど潤沢でないメキシコ連邦政府から算出されており、それを多数の職員によって競争分配するため、資金獲得と調査許可の諾否に関わる調査対象の選定には、連邦政府の意向が反映されてくるといってよい。

現メキシコ合衆国大統領のエンリケ・ペニャ・ニエト大統領は、2014 年の一般教書演説で観光客誘致の促進を目標の 1 つに掲げ、観光分野の国家インフラ計画に取り組むことを、繁栄する国家になるための 1 項目としている^(註11)。メキシコにおける観光産業は多様化しているが、国内最大の観光客を呼び込むテオティワカン遺跡への投資は今なお手厚い。

一方で、大学や研究機関所属の考古学者の中でも、メキシコ国外機関に籍があり、国外資金の調達可能な考古学者の場合は、比較的自由に調査対象を選定することができる。実際、こうした海外に籍のある考古学者によって、例えばテオティワカンにおいても遺跡中心部ではなく周縁部における小規模集落の研究 [Cabreria C. 2006, Robertson 2008]、また先行社会に関する研究 [Carballo et al. 2011, 嘉幡他 2014] などが徐々に行われている。しかしメキシコ連邦政府の資金を基に行われる調査研究に関していえば、テオティワカン遺跡公園内の遺跡中心部にあるピラミッドや、その周辺の重要遺構の発掘調査や修復・保存調査が大半を占めているのが現状である。

これまで見てきたように、テオティワカン遺跡における考古学調査は、以下 5 点が絡まりあうため、遺跡中心部の発掘調査を優先させてしまう傾向がある。すなわち、①メキシコを代表する象徴的な遺跡として、国家プロジェクトの下で開発された歴史性、②遺跡観光地としての価値の高さ、③更なる新しい「発見」を期待される観光資源としての宿命、④政府の意向を受けやすい INAH 所属考古学者の体質、⑤連邦政府による更なる観光開発の強化政策の 5 つである。遺跡中心部の学術調査は、古代遺跡の中核部の政治・経済的な側面を理解するためには、学術的に重要である。しかし、遺跡中心部の資料のみでは、テオティワカン社会がなぜ、どのように発達したのかという先行社会からの変遷プロセスや、地方と周縁社会の関係性といった、マクロな視点

からの社会像の描写が難しい。

4. 考古学者と地域社会

最後に、考古学者と地域社会の関係性について考えてみたい。考古学者にとって最も身近な相手は調査を補助する作業員と土地の権利者である。まずは作業員についてみてみたい。

一般的に、作業員として雇用するのは、発掘調査が行われる土地の地元住民たちである。発掘調査作業には男性を、遺物の洗浄作業には女性を雇うことが多い。メキシコの場合、考古学者の給与は考古学委員会より給与計算表[Consejo de Arqueología online:参照ウェブサイト]が出されており、これによって算出されるが、作業員に対する給与額は調査団長の裁量に任されている。そのため、通常はその土地の物価動向なども鑑みながら賃金を設定し、物価上昇や作業員の熟練度によって毎年少しずつ給与を引き上げていく。

テオティワカンの場合には他の遺跡と異なり、100年以上にわたる調査の歴史があるため、作業員には経験の豊富な熟練者が多く、半専門化している。長年、複数の調査が並行して行われ、途切れてしまうこともないため、熟練作業員の中には年間を通して複数の調査団を渡り歩きながら継続的に仕事をしたり、発掘作業以外の整理作業も兼業したりすることで、考古学調査のフィールドを専門的な職業とする作業員もいる。組合が存在するわけではないが、熟練の古老の中には作業員を考古学者に紹介・斡旋し、作業員1人1人を適材適所に差配し、給与交渉を行う、ブローカー的役割を果たすものもいる。また、INAHのテオティワカン研究所(*Cerámoteca de Teotihuacan*)やアリゾナ州立大学が置くテオティワカン研究センター(*Centro de Investigaciones Arqueológicas de San Juan Teotihuacan*)では、発掘調査後の整理作業が年間を通して行われており、遺物の洗浄から整理作業、報告書作成に至るまで、考古学者や修復・保存家の補助作業を担う作業員が通年で雇われている。中には土器分類や、フローテーション、遺物写真の撮影などを手掛け、学生の考古学者よりも考古学的作業に精通している作業員も存在する。考古学調査の調査許可は最長でも1年間が限度であるため、作業員の労働契約も1年毎なしい数か月ごとにしか結ばれない。しかし、かなりの数の作業員が調査団を渡り歩きながら、長年継続的に考古学調査に従事し続けている。そのため事実上、地域社会の誰にでも雇用機会があるわけではなく、考古学者が日常的に交流し、経済的利益を供与するのは少数の地元住人でしかない。ただ彼らは考古学者にとって、地域住民との間を繋ぐ貴重な理解者である。しかし、土地の権利者らと考古学者の間には大きな溝が存在する。

テオティワカン遺跡公園内の土地は、1964年の遺跡公園整備の際、メキシコ連邦政府の国家遺産長官(*Secretaria del Patrimonio Nacional*)の名のもとで地域住民から接収された(*Diario Oficial de la Federación online:参照ウェブサイト*)。しかしテオティワカン遺跡の都市域は遺跡公園の外側にも広がっているため、その保護保全を名目として1988年に遺跡公園の外側の土地に対しても連邦政府法令[*Diario Oficial de la Federación online:参照ウェブサイト*]により開発に規制がかけられた[Delgado 2010]。おそらくこれは、前年(1987年)のテオティワカン遺跡の世界文化遺産登録とも関係した法令整備であったと考えられる。遺跡周辺の土地は新たに3つのゾーンに区分され、1964年に接収された遺跡公園にあたる面積263ヘクタールの土地はゾーンA、遺跡公園周辺の重要な遺構が散在する面積1730ヘクタールの土地をゾーンB、ゾーンAとB以外でかつ遺跡の範囲内とみられる面積1387ヘクタールの土地をゾーンCとし、ゾーンごとに開発規制の段階が定められた。この開発規制が設けられた範囲は、かつての古代都市があった東西約10キロ、南北約7キロに及び、テオティワカン遺跡に隣接する複数の自治体の街区に重なるほどの非常に広い面積にあたる。ゾーンAはどのような新しい建造物も建設不可とされ、ゾーンBも新たな住居を建設することが規制された。ゾーンCも同様に保護対象とされ、発

掘調査により重要な遺構が出土した場合はそれを保護することが義務付けられた。これにより、テオティワカン遺跡の文化財は法令上も保護されることになったが、地権者は土地の使用権利が大きく阻害されることとなり、自由な建設活動ができなくなり、また土地の売買にも支障が出るなど経済的不利益を蒙ることになった。そのため地権者にとって考古学者と INAH は、土地の権利を奪うものという意識が植えつけられることとなり、例えば INAH とは無関係の外国人考古学者であっても考古学者という肩書きを持つものに対する警戒心は強くなった。

こうした土地問題に対する地域住民の潜在的不信感に輪をかけるように起こった 2003 年のウォール・マート建設問題は、大きな問題へと発展した^(註12)。ウォール・マート建設問題とは、米国に本部を置く世界最大のスーパーマーケットチェーンが、テオティワカン遺跡公園に隣接する自治体サン・ファン・テオティワカンのゾーン C 内への出店を計画し、建設を始めた問題であった。ゾーン C は上述のように、考古学的に重要な遺構が出土した場合、土地利用に連邦当局の規制を受ける地区である。建設前に行われた緊急発掘調査は部分発掘のみで、検出されたのは「小さな祭壇と石壁だけ」だったとアナウンスされた。ゾーン C の開発可否を判断する「遺構の重要性」の解釈基準は元々曖昧であり、緊急発掘調査を部分発掘のみで終了した INAH の調査態度から、INAH が最初の段階から開発許可を出すことを前提としていたのではないかと批判が集まった。普段は厳しく運用されている建設規制が、ウォール・マート建設に関しては簡単に許可が出たとの不信感を抱かれ、INAH の態度は地権者によって変るダブルスタンダードだとの批判が、発掘調査に関わらなかった考古学者や人類学者を中心に挙がった。またもう一面で、米国のグローバル経済を象徴するようなスーパーマーケットが、メキシコを代表するテオティワカン遺跡のすぐ傍に建設されることも、反米感情を伴う批判の矛先となった。結局、ウォール・マートが建設されてしまったことで、ゾーン設定による遺跡保護の大義名分には傷が付き、本来は届出が必要な建設活動を地権者が黙って行ってしまうなど、問題が続いている。このウォール・マートとそれに絡む土地の使用問題は、調査地選定にも少なからず影響している。発掘調査は INAH の許可があれば法令上は可能であるが、実際には必ず地権者の許可が必要である。そのため、考古学者や INAH に反感を抱く地権者が多数いる遺跡公園外側を学術調査することは、この問題以降、慎重にならざるを得なくなった。

これとは別に、2008 年から翌年にかけて問題になったのが、1990 年代に廃止されていた「光と音のショー」の再開問題であった^(註13)。「光と音のショー」は、ピラミッドの壁面をスクリーンにみたくて映し出した 45 分間の映像作品を音楽とともに楽しむもので、INAH と連邦政府観光省(*Secretaría de Turismo : SECTUR*)、また観光開発国家基金(*Fondo Nacional de Fomento al Turismo : FONATUR*)を得たメキシコ州政府によって企画されたものであった。当時のメキシコ州知事は現在のメキシコ大統領エンリケ・ペニャ・ニエトであり、彼のリーダーシップのもとで、メキシコ独立 200 年周年と INAH 創立 70 周年記念事業、そして、21 世紀に入って減少の一途にあった観光客を呼び戻す施策の一環として企画された。観光客が日帰りせず夜間も留まることになるため、遺跡公園の周囲で営業するレストランや土産物屋などで働く地元住民やホテル経営者などを中心に、観光産業に従事する地元経済はこれを歓迎した。しかしショーを投影するための LED ライトやケーブルの設置工事が開始されると、ボルト用の穴の深さが 5 cm とされていた当初の説明よりも深いことが明らかになり、その穴から浸透する水分による建造物の劣化が問題にされた。また LED ライトは遠距離からも視認できるむき出しの状態ではピラミッド基壇上面に設置されたため、遺跡景観の破壊や、増加する入場者や音楽の振動による劣化も問題とされた。考古学者や保存・修復家などからなる INAH の労働者組合は、遺跡保護の観点から「光と音のショー」の再開に反対する意見をユネスコ(国際連合教育科学文化機関: UNESCO)に訴え、最終的にユネスコの中止勧告も出されたため計画は撤回された^(註14)。だが、遺跡を保護対象とみなす考古学者と、観光資源としての活

用を願う地域住民の間に横たわる意識の溝が浮き彫りとなった事件であった。

5. 考古学者のジレンマ

テオティワカン遺跡を調査する考古学者の場合、遺跡が国家モニュメントとして重要な政治的対象であり、観光地として経済界からの介入も大きい。連邦政府や経済界は、観光資源として価値が高いテオティワカン遺跡のブランド力とコンテンツをさらに高め、その魅力を維持・向上することを主眼にしており、テオティワカン遺跡から距離の離れた周辺遺跡の学術調査に関心は薄い。遺跡の景観や保護の観点から問題視されつつも、再開一步手前まで進められた「光と音のショー」のように、政府が援助・推進するのはテオティワカン遺跡の観光資源化に関することであり、テオティワカン社会の成立過程を理解するうえで必要な、テオティワカン以外の遺跡の学術調査は第一の関心事項ではない。テオティワカン遺跡を調査する考古学者にとっては、メキシコ連邦政府による政治的・経済的資源化の方針に寄り添うことが、更なる調査資金と許可を獲得しやすくする構造がある。そのため考古学者は、テオティワカン遺跡中心部の調査を選択しがちであり、結果として、テオティワカン社会を総合的に様々な遺跡の調査から理解する方法よりも、テオティワカン遺跡の調査それ自体からテオティワカン社会を理解するという方法が選択されている。テオティワカン社会を理解するには、比較対象としてテオティワカン遺跡以外の調査も必要である。しかし、考古学者たちはその必要性を認識しているものの、踏み出せないというジレンマに陥っている。ただ、メキシコ国外を拠点とする考古学者を中心に、テオティワカン研究を遺跡の周縁部やテオティワカン以外の遺跡調査を通して俯瞰しようという動きが始まっている。こうした学術調査によって、テオティワカン社会全体の総合的な理解が深まり、テオティワカン以外の古代遺跡の資源化にも結びつけば、現在やや偏りのある調査傾向にも是正がみられるようになるのではないかと期待される。著者がテオティワカン遺跡「ラ・ベンティージャ地区」や、テオティワカンの先行社会にあたるトラランカレカ遺跡で実施している考古学調査も含めた、今後の課題である^(註15)。

本稿は平成 26-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（領域代表:青山和夫、課題番号 26101001～26101005）の研究成果の一部である。

註

(註 1) テオティワカン遺跡の南北軸は、真北より 15 度 30 分東に傾いている[Millon 1973]。

(註 2) 著者は、2003 年から杉山三郎（愛知県立大学特任教授）率いるテオティワカン「月のピラミッド」調査団に参加し、発掘・測量調査に携わってきた。

(註 3) ポルフィリオ・ディアスは、1876 年に第 59 代メキシコ合衆国大統領に就任以降、第 60 代（1877 年—1880 年）、第 63 代（1884 年—1911 年）大統領を務めた。メキシコ革命による失脚までの 35 年間の政治は独裁と評されるが、国内インフラの整備や外国資本の導入による近代化を成し遂げた面では再評価されている。

(註 4) シルグエンサは、「月のピラミッド」前庭部からピラミッドの下方に掘り進む、いわゆるトンネル発掘を行っている。彼の発掘の目的は、記録が残っていないため分からない。しかし歴史資料を調査した Schávelzon[1982]によれば、シルグエンサの発掘はヌエバ・エスパーニャ副王領における萌芽的な実証研究の一つとして評価することができ、アメリカ大陸初の考古学的発掘といえると思われる。

- (註 5) この博物館は、エルネスト・セディージョ大統領の任期中（1994 年-2000 年）の 1997 年に計画され、2001 年に壁画博物館（*Museo de la Pintura Teotihuacana*）として一度オープンした。しかしその後すぐに閉館し、2006 年に（*Museo de Murales Teotihuacanos Beatriz de la Fuente*）として名前を変更しリニューアルオープンした。一時的閉館の理由は明らかではないが、最初のオープン・セレモニーをセディージョ大統領の任期満了に合わせたために、工事や展示が終了しなかったためと思われる。その証拠に、著者が 2003 年に訪れた時は、基礎的な建設工事がまだ続いていた。
- (註 6) INAH の考古学委員会（*Consejo de Arqueología*）は、許可した調査を一覧[*Consejo de Arqueología online*: URL: <http://consejoarqueologia.inah.gob.mx/>]にして公表している。
- (註 7) 2008 年に著者がグアテマラの土産物屋をのぞいた際、そこで売られていた黒曜石製品の出所を店員に尋ねると、メキシコのテオティワカンから仕入れているとのことだった。
- (註 8) メキシコ国立自治大学をはじめとして、いくつかの大学には考古学や形質人類学を学ぶ修士課程や博士課程がある。それらを修了した者、または国外の大学を出た者も同様に、考古学者として活動している。
- (註 9) メキシコ国立人類学歴史学大学は 1938 年創立、その他に考古学の考古学専攻課程がある大学はベラクルス大学ハラバ校が 1944 年、ラス・アメリカス大学プエブラ校が 1946 年、ユカタン州立自治大学が 1970 年、メキシコ北部国立人類学歴史学大学チワワ校が 1990 年に設立された。その他にもケレタロ州立自治大学、メキシコ州立自治大学、サン・ルイス・ポトシ州立自治大学、サカテカス州立自治大学などにも考古学課程が設置されている。多くが 2000 年代以降の設置である（ケレタロ州立自治大学以下の設置年は不明）。
- (註 10) ラス・アメリカス大学プエブラ校の嘉幡茂准教授によれば、同校の伝統的な考古学課程も、近年の志望学生数の減少により、社会人類学課程と考古学課程を近い将来統合する方向ということである（嘉幡私信 2015 年 8 月）。ただし、この傾向がメキシコ全体の傾向なのか、私立大学の特殊な事情によるのかは今後、注意して観察する必要がある。
- (註 11) エンリケ・ペニャ・ニエト大統領の 2014 年の一般教書演説に関しては、[*3er Informe de Gobierno 2014-2015 online* : <http://www.presidencia.gob.mx/tercerinforme/>]を参照。
- (註 12) たとえばニューヨークタイムズ[online:<http://www.nytimes.com/2012/12/18/business/walmart-bribes-teotihuacan.html?pagewanted=all>]、ラ・ホルナーダ新聞（*La Jornada*） [online: <http://www.jornada.unam.mx/2013/01/09/politica/017a1pol>]
- (註 13) たとえばラ・ホルナーダ新聞（*La Jornada*）[online: <http://www.jornada.unam.mx/2011/10/27/cultura/a08n1cul>]
- (註 14) ユネスコによるレポートは[online : <http://whc.unesco.org/en/soc/726>]を参照。
- (註 15) 著者は 2014 年から、テオティワカン遺跡とトラランカレカ遺跡で考古学調査を実施している。テオティワカン遺跡の調査地「ラ・ベンティージャ地区」は、「死者の大通り」の西方 600m に位置するアパートメント・コンパウンド（神殿・住居複合建築）の集合地区である。トラランカレカ遺跡は、前 1200 から後 200 年前後まで利用された、テオティワカン社会の先行社会[嘉幡他 2014]であり、テオティワカン遺跡から直線で南東 50km ほどのプエブラ州にある。本調査は、テオティワカンの周縁社会と先行社会の考古学調査を通じて、テオティワカンで発生した初期国家の形成プロセスを通時的に明らかにしようとするものである。

引用文献

Batres, Leopoldo

1908 *Exploraciones y Consolidación de los Monumentos Arqueológicos de Teotihuacán*. Buznego y Leon, Mexico.

Bernal, Ignacio

1963 *Teotihuacan: Descubrimientos, Reconstrucciones*. INAH, Mexico.

Cabrera, Rubén, Ignacio Rodríguez, and Noel Morelos

1991 *Teotihuacán 1980-1982, Nuevas Interpretaciones*. Colección Científica I.N.A.H., Mexico.

Cabrera C., M. Oralia

2006 *Craft Production and Socio-Economic Marginality: Living on the Periphery of Teotihuacán, México*. FAMSI (<http://www.famsi.org/reports/03090/> Submitted 05/20/2005) .

Carballo, David M., Luis Barba, Agustín Ortíz, Jorge Blancas, Jorge H. Toledo Barrera, and Nicole Cingolani

2011 La Laguna, Tlaxcala: Ritual y urbanización en el formativo. *Revista Teccali*(2):1-11.

Cowgill, George

2015 *Ancient Teotihuacan: Early Urbanism in Central Mexico*. Cambridge University Press, Cambridge.

Delgado, Jaime

2010 Institución y sociedad: el caso de Teotihuacán. *Cultura y Representaciones Sociales*. 5(9):198-221. Instituto de Investigación Sociales, UNAM, Mexico.

Gamio, Manuel

1979 (1922) *La Población del Valle de Teotihuacán*. Secretaria de Agricultura y Fomento, Dirección de Antropología, Mexico.

嘉幡茂、村上達也、フリエタ・M・ロペス・J、ホセ・J・チャベス・V、福原弘識

2014 「メキシコ中央高原における初期国家形成の解明に向けて：トラランカレカ考古学プロジェクト」『古代アメリカ』17:119-127。

López Luján, Leonardo

1989 *La Recuperación Mexica del Pasado Teotihuacano*. INAH, Mexico.

Millon, René

1973 *The Teotihuacán Map, Part 1: Text, Vol. 1, Urbanization at Teotihuacán, Mexico*. University of Texas Press, Austin.

Murakami, Tatsuya

2014 Power Relations, Social Identities, and Urban Transformations: Politics of Plaza Construction at Teotihuacan. In *Mesoamerican Plazas: Arenas of Community and Power*, Kenichiro Tsukamoto and Takeshi Inomata (eds.), pp. 34-49. University of Arizona Press, Tucson.

Robertson, Ian

2008 'Insubstantial' Residential Structures at Teotihuacán, Mexico. FAMSI (<http://www.famsi.org/reports/06103/> Submitted 07/28/2008) .

Rutsch, Mechthild

2004 Natural History, National Museum and Anthropology in Mexico. *Perspectivas Latinoamericanas*, 1: 89-122.

Sanders, William. T., Jefferey R. Persons, and Robert S. Santley

1979 *The Basin of Mexico: Ecological Processes in the Evolution of a Civilization*. Academic Press, New York.

Schávelzon, Daniel

1983 La primera excavación arqueológica de América: Teotihuacán en 1675. *Anales de Antropología, XX:121-134*, Instituto de Investigaciones Arqueológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, Mexico.

Sugiyama, Saburo

2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan*. Cambridge University Press, Cambridge.

Sugiyama, Saburo and Rubén Cabrera

2000 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica en la Pirámide de la Luna, Teotihuacan: Segunda Temporada de Excavaciones*. 2 vols, Archive of INAH, Mexico.

(参照ウェブページ)

Consejo de Arqueología (考古学委員会)

給与計算表 http://consejoarqueologia.inah.gob.mx/?page_id=6683 (2015年10月6日)

許可済み調査一覧 <http://consejoarqueologia.inah.gob.mx/> (2015年10月6日)

Diario Oficial de la Federación (連邦政府官報)

<http://www.dof.gob.mx/index.php?year=1964&month=5&day=6> (2015年10月6日)

<http://gobiernodigital.inah.gob.mx/Transparencia/Archivos/13736387202.pdf> (DECRETO por el que se declara zona de monumentos arqueológicos el área conocida como Teotihuacan, 2015年10月6日)

Instituto Nacional de Antropología e Historia (国立人類学歴史学研究所)

INAH 統計による遺跡の観光客数 <http://www.estadisticas.inah.gob.mx/> (2015年10月6日)

La Jornada (ラ・ホルナーダ新聞)

光と音のショーの問題 <http://www.jornada.unam.mx/2011/10/27/cultura/a08n1cul> (2015年10月6日)

ウォール・マート問題 <http://www.jornada.unam.mx/2013/01/09/politica/017a1pol> (2015年10月6日)

Presidencia de la República (共和国大統領)

一般教書演説 (3er Informe de Gobierno 2014-2015) <http://www.presidencia.gob.mx/tercerinforme/>

The New York Times (ニューヨークタイムズ)

ウォール・マート問題 <http://www.nytimes.com/2012/12/18/business/walmart-bribes-teotihuacan.html?pagewanted=all> (2015年10月6日)

Unesco (国際連合教育科学文化機関: *United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization*)

ユネスコによるレポート [online : <http://whc.unesco.org/en/soc/726>] (2015年10月6日)

原稿受領日 2015年9月25日

原稿採択決定日 2015年10月12日